

幸いなるかな柔和なる者

一般に「山上の説教」と呼ばれている主イエスの長い説教（5章～7章）は「幸いなるかな」という印象深い言葉で始まっている。この短いながらも荘重な響きをもった「八福のメッセージ」において、「心の貧しさ」と「悲しみ」に次いで主イエスが語られた御国の子ら（キリスト者）の第3の特性は「柔和」である。「柔和な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ」（5:5）。何故、柔和な人たちは「幸い」と言われているのだろうか。主が言われた柔和な人とはどういう人であろうか。

広辞苑によれば、柔和とは「性質がやさしくおとなしいこと」とあり、また別の辞典によれば「やさしくおだやか」とある。日本語の柔和という言葉には、物やわらかくおとなしい、というきわめて女性的なひびきがあって、主イエスのこの言葉も、しばしばそのように解釈されてきた。

しかし、主イエスがここで言う「柔和」とは、そのような弱々しい優しさのことではない。「心の貧しさ」「悲しみ」が、第1義的に神との関わりにおける心の貧しさであり悲しみであるのと同様、ここで言う「柔和」も神との関わりにおける「柔和さ」である。すなわち、神の前に己れの全的な無力さと罪深さを悟り、それを悲しむ者が、神に対し（また人に対し）徹底的に身を低くする、そのへりくだった心の状態をいうのである。ある学者が適切に指摘しているように「意志の強い集中をもって神の前に自己を放棄すること」なのである。

また或る注解者は言う。主の言われた「柔和さ」とは、どのような反対や不義にあっても、それに対して悪意と報復の心をもって向かうことをせず、神の前に自らを低くし、神を待ち望んでじっと耐えて忍ぶこと、力を用いず自己を主張せず、神に自己を明け渡し、神に信頼して、隣人に対し優しさに徹し、謙遜に生きることであると。そのような柔和に生きるということ、特に自分に敵対する者に対してそのように生きるということは大変なエネルギーの要ることであり、時には大変辛く、苦しいことである。

抑圧された状況の中で、怒らず、憤らず、失望せず、身を低くして神に信頼して生きること、自分が神の前に罪人であることを認め、自己義認をやめ自尊心を捨て、神と人の前に身を低くすることは勇気のいることである。それは生まれつきのままの人間にはできない。アダムから受け継いだ古い人間性はそのような生き方に反発する。それはただ、人が、聖にして義なる神に直面して、己れの罪の現実を悟り、キリストに出会って、その救いの恵みを発見し、聖霊のご恩寵によってまったく打ち砕かれた者のみができることである。そして、そのような人こそ「幸いな人」と呼ばれているのである。なぜならそのような人こそ神の国に受け継ぐ人だからである。

主イエスこそ柔和の人であり、柔和に生きたお方であられた。「ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました」と使徒ペトロが言うように（第1ペトロ2:23~4）力ある神の子でありながら、罪人の罪の贖いのために、徹底的にご自身を空しくされて、人々のあざけりをしのばれ十字架の道を歩まれた。そして今も私たちの轡を負われて、共に歩んで下さる（マタイ11:28~30）。そのような生き方に、神の国に属する民の祝福があることを教えられたのである。